

読むよろこびを育む読書指導

岡 利道・宇田川千鶴・藤原 恭花

1. 研究の前提・目的

30年以上にわたり「こどもの本の専門店 こどもの広場（山口県下関市）」を営んできた横山眞佐子氏は、「面白い本の見つけ方」（YouTube 2019/01/14参照）において、次のような発言をしている（下線は筆者による・以下同様）。

【聞き手】

面白い本の見つけ方というか、この間さっきも話しましたがけれども、以前だったら書店に売られている絵本は、まあ大体どれを読んだってはずれはないですよっていう、そういう時代もあったと思うんですけども、今はそうでもないですよ。

【横山】

あのね、新しいものを選ばないってことだと思う。物語でも、最近新しく出た本、それは確かにリアルなことも描いてあるかもしれないけれど、例えばいじめや自殺や両親の離婚や様々な社会現象を捉えて、作品化したものはいっぱいあります。確かにそれは今の子どもたちに沿ってるような気がするけど、子どもが求めているものはね、そんなリアルなことじゃないと思う。もっと深いもの、もっと本質的なもの。それは、人が困っていたら手を差し伸べる人格を作ることとか、あるいは誰かがいじめられていた時に、そのいじめの根本、なぜいじめられているのとかなぜいじているのか、そのことが深く書いてあるものっていうのは、今の本ではなくて、かつて昔もそうだったっていう、そして今もそこに連なっている何かを描かれているものといったら、今の本じゃないような気がする。

私たちがここで着目する、読むよろこびを育む本というものに引き付けると、それは「面白い本」と言い換えることができ、さらにそれは「最近新しく出た本」ではないとの示唆を得ることができる。その理由として、「子どもが求めているものはね、そんなリアルなことじゃない」思う。もっと深いもの、もっと本質的なもの」なのであり、なかんずく「もっと深いもの、もっと本質的なもの」が「深

く書いてあるものっていうのは、今の本ではなくて、かつて昔もそうだったっていう、そして今もそこに連なっている何かを描かれているものといったら、今の本じゃない」ということが挙げられている。

では、その「今の本じゃない」ものとはどのようなものか。横山氏の発言を追ってみよう。

だから、本を選ぶ時に、奥付とか見てね、これ何刷してあるのかなあ、何回刷ったのかなって見ると、30回も何回も何回も印刷されているっていうことは、その間ずうっと読者がいたわけですよ。それを見て選ばれた方が、今書店に並んでいて、売れていますよっていう本よりも何か正しく選べるような気がします。

『よかったねネッドくん』は、出たのが1969年に初版が出て、2012年に22刷。すごいよね。22回も刷られているんですよ。

(中略)

これすごい！『大どろぼうホッツェンプロッツ』。1966年に初版が出て、2010年に100刷って。そして、そこで改版して。2011年に改版したという、刷り直したんですよ。活字を変えたりしてね。それで、2010年に改版したのに2011年にはもうすでに7刷になっている。ねっ、それってなぜって思うわけよね。これは、ドイツのお話で、大どろぼうホッツェンプロッツが、なんか男の子がね、プレゼントした、おばあちゃんにプレゼントしたコーヒー挽きよ、ただのね、コーヒー挽きをどろぼうするわけ。で、そのどろぼうしたホッツェンプロッツを追っかけていく二人の少年の話なんだけど、一冊目では捕まり、二冊目で脱獄し、また捕まり、三冊目でまた脱獄している、そういう話なんだけども、なぜこれがそんなふう子どもたちから歓迎されるのかを、やっぱ子どもと一緒に考えてほしいですよ。

わくわくする。次どうなるんだろうと思う。で、自分もそういう場所にいみたいと思う。でも、絶対いられないわけだけど。現実のことばかりにとらわれるのではなくて、やっぱ人は別の人生が生きられるし、別の世界にも行けるってことをわかれば、今、現実、苦しくても、ひょっとしたら次はこうなるかもしれないっていうこと、考えられるようになるじゃない？ ねえ。

つまり、「奥付」を確かめ、「何刷」もされているところの、「その間ずうっと読者がいた」という証左（形として認められる指標）が得られる本なのである。さらに横山氏は、『よかったねネッドくん』や『大どろぼうホッツェンプロッツ』といった代表例を挙げ、その内容を「わくわくする。次どうなるんだろうと思う。

で、自分もそういう場所にいてみたいと思う」ほどのもので、読者の現実とは違う「別の人生が生きられるし、別の世界にも行けるってことをわかれば、今、現実、苦しくても、ひょっとしたら次はこうなるかもしれないっていうこと、考えられるようになる」ような気持ちにさせる力を秘めていることを強調している。

これらは、全て横山氏の経験から導かれた見解である。が、私たちは、全面的に同意するものである。ただし、「何刷」もされているということは、かえって議論があいまいになる恐れがあるので、私たちは、「長く読み継がれている本」あるいは「図書館員が推薦リストの中に位置付ける本」とする。そこで、ここまでのことを、本研究のテーマである「読むよろこびを育む読書指導」の仮説とし、以下にわたって、それが支持できるということを明らかにする。これが、本研究の目的である。

2. 研究の方法

以下の (a) から (c) の方法で進めていくことにする。

- (a) 読書がよくないという人はいないであろうが、よいものであるにせよ、その場合、至極あいまいな捉え方で済まされている気がしてならない。読書というものが何故大切にされるのか、改めて捉え直してみたい。特に、ここでは、学校教育関係者が教育活動に当たる際に、必ず拠り所とするもの、即ち学習指導要領で読書というものがどのように位置づけられているのか、確かめておくことにする。子どもたちの発達段階に応じて、細かく捉えるべきであろうが、本研究では小学校の児童の読書を対象とするが故に、小学校学習指導要領（平成29年告示）解説・総則編、小学校学習指導要領（平成29年告示）解説・国語編における読書（学校図書館を含む）についての言及をまとめることにする。
- (b) 長く読み継がれている本に注目し、次のような観点で調査をする。
 - ①公共図書館においてまとめられているもの
 - ②文献からわかること
- (c) 長く読み継がれている本が、読むよろこびを育むものであることを明らかにし、典型的な一書として『エルマーのぼうけん』を取り上げ、例証していくことにする。すでに触れたように、横山は『よかったねネッドくん』や『大どろぼうホツェンプロッツ』を挙げているが、それ以外の本として『エルマーのぼうけん』を選んだ。勿論、それが長く読み継がれている本であることを、上記 (b) の部分で証明しておくつもりである。その際に、述べていく内容が恣意的にならぬよう、文献調査から導かれることを重視する。

3. 研究の結果

(1) 小学校学習指導要領（平成29年告示）解説から

まずは、総則編から見ていこう。この段階で育成すべき資質・能力に目を向ける。それは、「各学校においては、児童の発達段階を考慮し、言語能力、情報活用能力（情報モラルを含む。）、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力を育成していくこと」（p. 48）の部分から掴むことができる。能力のうちの「言語能力」がキーとなり、「言語能力育成を図るため、各学校において必要な言語環境を整えるとともに、国語科を要しつつ各教科等の特質に応じて、児童の言語活動を充実すること。あわせて、（中略）読書活動を充実すること。」（p. 80）と解説が進む。ここに、読書が位置付けられるのである。読書の重要な目標の一つとして、「言語能力育成を図る」ということが浮かび上がってくる。

なお、読書の価値と、学校図書館の役割に関しては、次の箇所が参考になる。即ち、「読書は、多くの語彙や多様な表現を通して様々な世界に触れ、これを疑似的に体験したり知識を獲得したりして、新たな考え方に合うことを可能にするものであり、言語能力を向上させる重要な活動の一つである。（中略）こうした、読書活動の充実や、前述の児童の言語環境の整備のためにも、学校図書館の充実を図ることが重要である。」（p. 83）との部分である。

関連して、学校図書館の機能への言及の中に、「児童の想像力を培い、学習に対する興味・関心等呼び起こし、豊かな心や人間性、教養、創造力等を育む自由な読書活動や読書指導の場である「読書センター」としての機能」（p. 91）とある部分も見逃せない。

こうした内容を受け、私たちは、読むよろこびというものが、①「言語能力を向上させる」よろこび・②「様々な世界に触れ、これを疑似的に体験したり知識を獲得したりして、新たな考え方に合う」よろこび・③「想像力」や「創造力」を培うことができるよろこび・④「豊かな心や人間性、教養」が身に付いていくよろこびといった、四つのものと置き換えることができるのではないかと考えた。

次に、国語編も見てみよう。現行の学習指導要領に比べ平成29年度版の新学習指導要領では、国語科の内容として読書というものがより重視されている。読書の意義や効用などに関する事項として、「読書は、国語科で育成を目指す資質・能力をより高める重要な活動の一つである。自ら進んで読書をし、読書を通して人生を豊かにしようとする態度を養うために、国語科の学習が読書活動に結び付くよう発達の段階に応じて系統的に指導することが求められる。」（p. 26）とあり、上述の④と響き合うことがわかる。

具体的には、〔知識及び技能〕の内容の(3) 我が国の言語文化に関する事項に読書が位置付けられており、学年ごとに見ると、第1学年及び第2学年では「読書に親しみ、いろいろな本があることを知ること」、第3学年及び第4学年では「幅広く読書に親しみ、読書が、必要な知識や情報を得ることに役立つことに気付くこと」、第5学年及び第6学年では「日常的に読書に親しみ、読書が、自分の考えを広げることに役立つことに気付くこと。」と並んでいる(p. 27)。

国語科の授業においては、このように読書に親しむような指導が一貫して行われることになる。親しむことには段階性が認められる。即ち、低学年「読書に親しみ」、中学年「幅広く読書に親しみ」、高学年「日常的に読書に親しみ」となっていくことである。

さらに細かく見ていくと、その解説には注目に値する記述がある。低学年では、「読書を通して、様々な知識や情報を得たり、自分の考えを広げたりすることができる力の育成を目指し、日常的に読書に親しむようにすることが大切である。そのためには、読書を通して、新しい知識を獲得したり物語の世界を疑似的に体験したりできる読書の楽しさや面白さを感じることが大切である。」(p. 56)の部分である。上述の②と響き合うのである。

同様に中学年では、「幅広く読書に親しむとは、多様な本や文章があることを知り、読書する本や文章の種類、分野、活用の仕方など、自分の読書の幅を広げていくことである。読書が、必要な知識や情報を得ることに役立つことに気付くためには、読書によって、疑問に思っていることが解決したり、新しい世界に触れて自分の興味が広がったりする楽しさを味わうことが大切である。」(pp. 92-93)の部分である。

また同様に、高学年では「日常的に読書に親しむとは、読書の楽しさや有効性を実感しながら、日常生活の中で主体的、継続的に読書を行うことである。読書が、自分の考えを広げることなどに役立つことに気付くとは、読書によって多様な視点から物事を考えることができるようになることに気付くことである。本などの中の言葉は、時間や空間を超えて読者に伝わり、様々な物事を理解したり、書き手の多様なものの見方や考え方に触れたりすることを可能にする。それらの中から自分を支える言葉を見付けたり、今までになかった考えを発見したりすることなどによって、読書の意義をより強く実感することができる。」(p. 131)の部分である。

上述の②に関しては、これらのような内容を含むものと受け止める。

(2) 長く読み継がれている本への注目

まず、公共図書館においてまとめられているものの検討をする。

公共図書館の幸いにも経験豊富な事務スタッフの方にインタビューすることができた。その日時と場所並びに相手は、以下のとおりである。

日時 平成26年（2014年）10月18日14時から約1時間

場所 鳥根県立図書館事務室

相手 鳥根県立図書館子ども室 子ども読書支援係長 F氏

次に、その内容であるが、毎年発行されている「おすすめしたいこどものほん」の中から「ながく読みつがれた本」の選定理由についてたずねるということであった。以下、Q & A方式で概要を記すことにする。

【聞き手】

本の選定の方法はどういったものか。

【F氏】

まず、一番目に子ども室に勤務している四人がそれぞれに、多くの書評を読む。二番目に書評を読み、多く取り上げられていたものや印象に残ったものを実際に読んでみる。また、子ども室での貸し出しが以前から多いものも改めて読んでみる。三番目は、個人それぞれで読み、気に入った本を選定する四人全員にも読んでもらう。そして、その中から話し合いで良いと思うものを選定する。

補足読んでみて感じることを大切にして選定していらっしやるようだ。この方法が確立したのは最近の10年あたりのこと。

【聞き手】

本を選定するにあたり、注意点は何かあるのか。

【F氏】

現在も書店などで購入可能なこと。また、一般家庭の親子が購入を躊躇わない程度の金額のものであること（高価すぎないこと）。また、本の「独り読み」ができるようになるために、小学3年生までは主に読み聞かせに適したもの、それ以降の年齢になると独り読みが出来るような本も含めている。

補足読み聞かせを重視しておられる。小学校の下学期でいい本に親しませ、基礎づくりをしたのちに、上学年で独り読みができることを期待。ここに、当館の特色が出ている。

【聞き手】

何時から選定、発行されているのか。

【F氏】

昭和60年頃には発行されていたが、毎年少しずつ変更が加えられている。しかし、大きな変更はない。

【聞き手】

本の選定を通して、子どもたちに向けて思うことがあるか。

【F氏】

生涯にわたり、心に残るような一冊を見つけてほしい。

以上のことから、同館では、司書たちが子どもの顔を思い浮かべながら、あるいは自分が読み聞かせる立場だったらと考えながら、一冊一冊の本を評価していくことを大切にされていることがわかる。

幼児期や小学校の下学年までで、読み聞かせを大事にしていきたいとの思いを基に、そうした観点から本を評価し、「おすすめしたいこどものほん」という冊子にリスト化してまとめているわけである。当然、小学生対象でも絵本が入ってくることになる。

その「おすすめしたいこどものほん」だが、インタビューの後半でさらに説明していただき、次のようなことが分かった。即ち、その冊子（パンフレット）は、一般家庭で保護者の方の迷った時の助けの一つになればよいと考えただけでなく、教育現場と連携して子どもの読書活動を推進していこうという計画にも役立てたいという意図もあるわけである。「子ども読書県しまね」というスローガンのもと、島根県内各地の公立図書館、学校図書館、さらには、小学生だけでなく未就学児・中学生・高校生・特別支援学校生とも連携を図るのに利用されている。また、「子ども読書県しまね」にはもう一つの特色として、「親子読書アドバイザー」や「読みメン」など、親子間のコミュニケーションをひろげる取り組みもある（同館ホームページ参照）。

その他、小中学校の授業等において使用する図書のコアとなる約2,000冊を、「学校図書館活用教育図書」として選定し、同館に配備するとともに、県内21市町村（公共図書館等）に寄託しているそうである。市町村の図書館等は、さらに小中学校等に貸出しすることによって、連携を強くする中で、学校図書館活用教育のさらなる推進を図っているとのことであった（上掲ホームページ参照）。

なお、最新号の「2018年度 おすすめしたいこどものほん（小学生向け）」の「低学年から中学年向け 長く読みつがれた絵本・文学」のリストに、『エルマーのほうけん』（シリーズ全3冊、R・S・ガネット／作、R・C・ガネット／絵、渡辺茂男／訳、福音館書店、各1,200円）掲載されていること（かなり前からである）は言うまでもない。

また、広島県立図書館の「ひろしまネット子どもの読書ハンドブッカー出会うほしい300冊」を参照すると、8歳から9歳向けの児童書のブックリストにも、『エルマーのぼうけん』が掲載されている。

さらに、山梨県中央市立図書館のおすすめ児童書（新入生ブックプレゼントリスト20）中にも、『エルマーのぼうけん』がリストアップされている。そこでの紹介文によれば、「エルマーのぼうけん 勇敢な男の子エルマーは、どうぶつ島に捕えられているかわいそうなりゅうの子を救うため、旅に出かけることに…。危機を乗り越えての冒険物語。」との誘いかけが目を引く。

同館がその「選定にあたり大事にしたこと」として、「①児童が身近な大人と楽しめ、より深く豊かな読書活動が行えるような、発達段階に合った優れたもの。②長い間読み継がれたもの、近年出版された本の中で今後も子どもの支持を受けられる可能性の高いもの。③絵本・幼年童話・昔話・ことば・詩・日本の作品・外国の作品・科学よみもの等、幅広い分野から選定。」とあり、いずれの公共図書館においても同様な見解が示されていることがわかる。

例えば、山梨県中央市立図書館が、そのような本の情報を発信する理由として、「読書は子どもたちに、様々な知識や情報を与えるだけではなく、感動し癒され、生きる勇気を与えてくれます。乳幼児期からの読み聞かせや自らの読書を通して、子どもたちは言葉を学び、感性を磨き、豊かな想像力を育て、自ら考え、生きる力を身につけていきます。自らの生活体験と読書によって養われた様々な力は、子どもたちが今後、大人になって行く過程にとって、欠かすことの出来ない大切な要素となります。」と同館ホームページで述べる。先の1で触れた横山氏の経験知と相通じるものがある。小学校学習指導要領解説で注目したこともほぼ同じ考え方である。

ここで視点を変え、文献からわかること、と歩を進めたい。注目するところの「②長い間読み継がれたもの、近年出版された本の中で今後も子どもの支持を受けられる可能性の高いもの。」については、これまでに、大なり小なり先達が述べていることであろう。いわゆる古典の存在意義といったことを否定する向きも少ないはずである。そういう中で、あえて挙げていくことにしよう。子どもの本に関わってきた人物として、作品を書き、編集の仕事をし、研究し、評論し、その上図書館のこともよく知っているとなると、石井桃子氏がその代表的な一人であると考える。そこで、以下に、石井氏の言を引くことにしたい。

石井氏が創設したかつら文庫という私設の図書館を引き合いに出しながら、以下のように話が展開する。

私がかつら文庫を始めたのは、日本では公共図書館になかの児童室がちゃんとしていなかったからです。日本の公立の図書館がよくないって、雑誌（筆者注：『文藝春秋』1996年8月号）の上で言っちゃくと、ちょっと差しさわりがあるかもしれませんけど。東京二十三区の区長さんがいま、図書館に司書職はいらないうっていい出したくらいですからね。図書館の運営も民間に委託しちゃうとか。役所の戸籍係の人が図書館に来て、三年たつと今度は健康保険の方へ行ったり（笑）。ほんとに残念だと思うのは、図書館員が本を選べるようになるまで、そこに居つけないことです。「あ、この本は去年も子どもが喜んだ、今年もまた喜んだ」ということを経験しないでよそへ移っちゃうんですね。

アメリカへ行きましたら、図書館がほんとにみごとだったんです。図書館員も非常に見識を持った人たちで、古文書から児童文学の発達からすっかり学んで、どうして今日の児童文学に至ったかということを知ってから図書館員になるわけです。そういう人がカウンターに座ってて、そして子どもに自由に本を取らせてみると、新刊書で二、三年で消えていってしまうものがあることを知る。その一方で二十年、三十年読まれてるものがある。読まれる本はどこかに共通点があるわけです。題材はみんな違いますけどね。その共通点をまとめると、メッセージは普遍的なんです。万国共通なんですよ。そういうことを知った人たちが、古典に照らして、新刊本を選択するわけなんです。

何を目安に選ぶかということ、子どもには、外の世界がどう目に見えるように書かれているかということです。——心の中の「淋しい」だの「悲しい」だのっていうことは、読み手の心の中におこればいいことです。やっぱり「泣いた」とか「お母さんがいなかった」とかいう心の中におこる情緒は、物か事で表わさなくちゃならない。自分が選んだ本を棚に並べときまして、来年もまた読まれるか、その次の年になっても読まれるかということで、図書館員も勉強するわけです。

やはり子どもにとっては、手ごたえをもって掴めるものがあるかということですよ。そういうふうにして、本を選ぶんで、選ぶ基準がとてもはっきりしてるんですね。当てずっぽで「これ面白そうだから」というんじゃないんですね。そうやって選んだ本が三十年読まれれば、基本図書というものになっていくわけですよ。

読まれる本というものの共通点として、普遍的なメッセージがあるということが強調されている。普遍的なメッセージとは、「子どもには、外の世界がどう目に見えるように書かれているかということです。——心の中の「淋しい」だの「悲

しい」だのっていうことは、読み手の心の中におこればいいことです。やっぱし「泣いた」とか「お母さんがいなかった」とかいう心の中におこる情緒は、物か事で表わさなくちゃならない。「やはり子どもにとっては、手ごたえをもって掴めるものがあるかということですよね。」の部分はその説明となるだろう。

これまでに述べてきたことより、児童（幼児あるいは生徒にも適用できると考える）にとって、読むよろこびを育むものの重要な一つとして、長く読み継がれている本が挙げられるとの主張をするものである。

(3) 長く読み継がれている本としての『エルマーのぼうけん』

ここでは、読むよろこびを育む典型的な一書として『エルマーのぼうけん』を取り上げ、例証していくことにする。

①データに基づくものとして

鳥越信（1990）によると、1989年までの調査で、「要するに、この地球上に生まれた子どもの本の中で、二五年以上の生命を持ちつづけている本をリストアップする、というのが唯一無二のモノサシです。」とその著の「はじめに」で宣言されたとおり、データで見る超ロングセラー本のブックリストが収められている。『エルマーのぼうけん』は、1948年発行の本としてリストに入っている。ただし、その年は、アメリカでの初版の発行年である。日本語版の初版は1963年であるので、1989年の時点でも26年経過しており、文句なしに「二五年以上の生命を持ちつづけている本」と言うことができよう。

②研究団体の選出によるもの

日本子どもの本研究会（1986）を取り上げる。「刊行のことば」の中に、「さいごに資料編として、これから研究を始めるさいに、読んでほしい児童書や研究書のリスト、各地講座のカリキュラム、読書運動の歩みと現状などを網羅して、読者のかたがたの便宜をはかるようにしました。」とあり、研究団体としての推薦本のリストである。『エルマーのぼうけん』が入っているところは、「三 小学校中級」である。「日本子どもの本研究会・幼年文学研究部会選」となっており、「心の世界の広がりとともに、抽象的な想像や社会問題への認識も芽ばえてくる。より深く豊かな成長への出会いが望まれる。」との短いコメントがある。

なお、日本子どもの本研究会（2000）では、『エルマーのぼうけん』が小学校1・2年生への推薦本に入っており、上掲の見解とのずれが見られる。

神宮輝夫ら（2000）は小規模で、研究グループと言った方がよかるうか。「いつも一緒に」のキーワードで選出された幼年文学の部に『エルマーのぼうけん』が入れられている。ここでは、小学校・低学年からといった括りが設けられている。

③作家その他の推薦によるもの

赤木かん子（1995）（2014）では子どもの本研究者である氏自身が、鳥越信（1992）では漫画家・柴門ふみ氏が、それぞれ『エルマーのぼうけん』の価値や魅力を述べている。同様に、吉永幸司・森那博（2017）では子どもたちが『エルマーのぼうけん』中で引き付けられる表現やそこを生かした読み聞かせの方法が、滑川道夫（1973）では『エルマーのぼうけん』を小学校6年間の読書指導のカリキュラム（指導計画）に組み込んだプランが紹介されている。

④子ども自身の反応から～まとめにかえて～

最後にやはり、子ども自身の言を引いてみたい。まさに“子どもに聴け”である。「中国新聞」で毎日曜日に掲載される「青春文学館」における、小学5年・上田皓亮君の「ちえと勇気にわくわく」という寄稿である。

エルマーのぼうけん ルース・スタイルス・ガネット著（福音館書店）

上田皓亮（尾道市立美木原小5年）

ちえと勇気にわくわく

ぼくがこの本をえらんだきっかけは、お母さんが弟に読み聞かせをしていておもしろそうだと思ったからです。

主人公のエルマーは、家の近くで年をとったのらねこに会います。そして、そののらねこから、どうぶつ島でとてもおそろしいもうじゅうたちにつかまっているりゅうの子どもがいることを聞きます。

空を飛ぶことがゆめだったエルマーは、そのりゅうの子どもを助けだすことができれば、りゅうのせ中に乗って空を飛べるのではないかと考えます。そこで、りゅうの子どもを助ける旅に出ることを決めます。

エルマーは、とてもふしぎな荷物をリュックにつめてどうぶつ島にわたりました。チューインガム、キャンデー、わゴム、じしゃく、ヘアブラシ、いろんな色のリボンなどです。そして、もうじゅうたちに会うたびに、これらの物をうまく使ってあぶない場面をきりぬけていきます。そこが、この本の一番わくわくするところです。

エルマーは、とても勇気がある男の子だと思います。なぜなら、今までどうぶつ島に行って生きて帰ってきた人は一人もいないと聞いても、平気で行くことにしたからです。もしぼくだったら、そんな話を聞いたらかわくなって、空を飛ぶゆめはあきらめてしまうと思います。

だれも思いつかないようなアイデアを考え出すエルマーは、勇気も、ちえもあるかしこい男の子だなあ、と思いました。

これまでに私たちが注目したことがらが多くちりばめられているような気がしてならない。『エルマーのぼうけん』が読むよろこびを育む本のうちの一冊となっていることを確実に示す手記であると考える。

4. 今後の課題

私たちは勿論、子どもに『エルマーのぼうけん』を一冊だけ読ませれば、読むよろこびを育むことができる、と主張するわけではない。それに匹敵する本は多数あるだろう。今を生きる子どもたちに読むよろこびを育む本を見出し、教育課程として体系化する作業が期待されだろう。その実現は、言うは易し行うは難し、である。しかし、教育現場からの要望は強い、と見る。めざすは、滑川道夫(1973)の仕事の継承発展・現代版の作成である。

付記

共同研究として本論文はなされた。広島文教女子大学人間科学部初等教育学科教授である岡 利道の指導により、次の二名の卒業研究が提出された。

宇田川千鶴. 平成26年度卒業研究「読み継がれている児童用図書」. 広島文教女子大学人間科学部初等教育学科児童教育コース国語専修.

藤原 恭花. 平成30年度卒業研究「読書意欲を高める児童向けの本とは」. 広島文教女子大学人間科学部初等教育学科児童教育コース国語専修.

上記二名の卒業研究(論文)の成果を基に、指導教員である岡によりこの度新たに加筆修正をし、本論文となったことをお断りしておきたい。

参考文献・記事・URL

赤木かん子. 1995. 絵本・子どもの本 総解説. 自由国民社.

赤木かん子. 2014. 子どもを本嫌いにしない本. 大修館書店.

石井桃子. 2015. 子どもに歯ごたえのある本を. 河出書房新社.

神宮輝夫(監). 2000. だから読まずにいられない. 原書房.

文部科学省(編). 2017. 小学校学習指導要領解説国語編. 東洋館出版.

文部科学省(編). 2017. 小学校学習指導要領解説総則編. 東洋館出版.

滑川道夫. 1973. 学級の読書指導. 国土社.

日本子どもの本研究会(編). 1986. 新版 子どもの本の学校. ほるぷ出版.

日本子どもの本研究会(編). 2000. どの本よもうかな? 1・2年生. 国土社.

ルース・スタイルス・ガネット(渡辺茂男(訳)). 1963. エルマーのぼうけん. 福音館書店.

鳥越 信(編). 1990. 子どもが選んだ子どもの本. 創元社.

鳥越 信(編). 1992. 子どものとき、この本と出会った. 童心社.

- 吉永幸司・森那 博. 2017. 子どもが輝く読書力を身につける指導術. 小学館.
中国新聞. 2019年(平成31年)1月6日(日曜日). (第9面)読書-青春文学館.
広島県立図書館. 「ひろしまネット子どもの読書ハンドブック」—出会ってほしい300冊—. <http://www2.hplibra.pref.hiroshima.jp/> (参照2018. 6. 22).
島根県立図書館. 2018年度おすすめしたこどものほん. <http://www.library.pref.shimane.lg.jp/> (参照2018. 6. 22).
山梨県中央市立図書館. 新入生ブックプレゼントリスト20. <http://www.lib.city-chuo.ed.jp/> (参照2018. 6. 22).
横山真佐子. 面白い本の見つけ方. <https://www.youtube.com/watch?v=6ZDpY1nui88>
(本学教授・本学学生)